

**■地域を担う「裏方」と「協働」の実践・研究  
～ゼミ「とちお祭への裏方参画と調査・情報発信」～  
澤井 芳秀（長岡大学 4 年）  
推薦者：今瀬 政司（長岡大学）**

長岡大学の今瀬ゼミでは 2014～15 年度、「協働」をテーマに長岡市栃尾の「とちお祭」に裏方参画している。

とちお祭は、毎年夏に行われる歴史の長い祭りであり、2015 年度で 61 回目を迎えた。かつて栄えた繊維業界が中心に行っていた「繊維まつり」に由来する。イベントで特徴なのが、酒樽を積んだみこしを引き合う「全日本樽みこし綱引き選手権大会」、各地区・団体がパフォーマンスをしながら街中を練り歩く「仁和賀行進」、花火師しかできない筒設置や点火等以外すべて住民が手作りで作り、山の頂上で 5000 発を打ち上げる「大花火大会」である。

今瀬ゼミでは、ゼミ生自身で企画を立て、とちお祭の①「裏方」（事務局スタッフとして会合出席、設営等の事前準備、当日運営、片付け等）、②「表方」（地区住民と共に祭りのイベントに出場）、③「調査研究者」（祭の裏と表、歴史、地域の産業や文化等を調査して報告・提言・情報発信）の 3 つの立場を兼ねて祭りに参画している。

ゼミの取り組みでは、地域活性化という実践的成果と共に研究成果を生み出した。今瀬ゼミと地域の人々との「協働」の関係が築かれて、新たな協働企画も生まれた。学園祭で「仁和賀行進」を出前開催したり、活動・研究成果パネルの市内巡回パネル展も協働で実施した。「協働」の関係は、実績と信頼を積み重ね、互いに必要性が出てくることで自然と出来上がるものであることが明らかになった。

また、ゼミで「裏方」を担い、報告書やパネル展等で「裏方」がどういった作業を行うのか発表することで、祭を陰で支える「裏方」の重要性を明らかにすると共に、地域の人々の関心が高まるきっかけを作れた。長岡市栃尾も過疎化が進むが、地域において行事等に継続性を持たせる為には、地域外の協力をきっかけとして、地域の者自身が「裏方」にも積極的に関わることが重要となる。これらのことを実践・研究成果として具体性をもって、分析・整理することができた。